書評

『キリスト教神学資料集・上』

アリスター・E・マクグラス編、古屋安雄監訳

「中道」をゆく英国神学の本領発揮

評者・森本あんり（国際基督教大学教授）

至れり尽くせりの教科書である。神学という学問を学ぶ上で、これほど便利な教科書は少ない。主題ごとに歴史と現代からの文献が簡潔に引用され、それぞれに導入の説明と、内容の解説、さらには「研究のための問い」までもが用意されている。最後の「問い」は、初版にはなかったが、実際に各国で教科書として使われた経験から付加されたもので、まさに「実用試験済み」の良書といってよい。

このような書物を「コンペンディウム」というが、その出来にとって決定的なのは編者の力量である。そしてマクグラスこそ、その任にもっともふさわしい神学者である。まだ50歳代前半であるが、若い頃から飛び抜けた広さと深さを併せ持つ神学者で、本書にも「中道」をゆく英国神学の本領が発揮されている。特定教派に偏ることなく、東方の伝統にも目配りが利いている。

なかには、通常の神学書ではあまりお目にかからない名前も登場する。欽定訳聖書との関連で触れられる「ジェイムズ一世」などはその例であるが、自分で選択しておいて、解説では「歴史的価値はほとんどない」と斬るあたり、テキストの取捨選択はなかなか考えさせられる。ただ、上巻にはアジアの神学者が1人も登場しない。21世紀の神学書としてはやや残念である。

上製本で、本棚に飾っておくだけでも何となく賢くなりそうな造りであるが、上下巻で2万円を超えるのでは、おいそれと貧乏神学生に買わせるわけにゆかない。内容からすると、版組にもう少し工夫があってもよかったであろう。ちなみに、原著のコンパニオンとして同著者による『キリスト教神学入門』が同じ出版社から同じ装丁と同じ厚さで出ているが、その訳書（教文館）は2段組で1冊に収まっており、値段も3分の1である。この違いをどう考えるべきか。せっかくの姉妹書なので、両書にもう少し連携があったらと思う。

いずれにせよ、手分けをして困難な翻訳作業のまとめをされた代表者の藤原淳賀氏に、深く感謝を申し上げ、刊行を喜びたい。

キリスト新聞社
A5判　上製・922頁
2007年7月末日まで
特価11550円、
通常価格12600円
下巻は2007年9月刊行予定。